

古事記ふるしごのきみ

(1)

アマツチハジメテアラワレシトキ タカアマハラニナルカミノナ
天地初発之時 於高天原成神名

アマノミナカノヌシノカミ、
天之御中主神 訓高天云 (高の下の天を訓じてアマと
阿麻下效此 いう 以下これにならう)

つぎにタカミムスビノカミ、 つぎにカムムスビノカミ
次高御産巢日神 次神産巢日神

コノミハシラノカミハ、 ミナヒトリガミニナリマンシテ
此三柱神者 並独神成坐而

ミラカクスナリ
隐身也

ツギニクニオサナクウキアブラノゴトクシテ
次国稚如浮脂而

クラゲナスタダヨヘルノトキ 流字以上
十字以音
久羅下那州多陀用弊流之時

(流の字の上を以て
十字音を以てす)

アシカビノゴトモエアガルモノニヨリテナルカミ、ノナ
如葦牙因萌騰之物而成神名

ウマシニアシカビヒコヂノカミ、 (この神の名
此神名 音を以てす)
宇摩志阿斯訶備比古遲神

ツギニアマノトコタチノカミ、 (常を訓じて登許と云い
訓常云登許 (常を訓じて登許と云い
訓立云多知 立を訓じて多知と云う)
次天之常立神

コノフタハシラノカミマタヒトリガミニナリマシテ、 ミラカクスナリ
此二柱神亦独神成坐而 隐身也

ウエノクダシラノイツハシラノカミハコトアマノカミ、
上件五柱神者别天神

伝統的に「アメツチハジメテヒラケシトキ」と読まれてきた。しかし「發」を「ひらく」と読むのは本居宣長あたりが権威づけたこと。古来「發」という文字はいろんな意味をつけられている。語形に弓と投げけるの手の右側を組合せた文字が入っているように、弓を放つ、勢いよく飛び出していくイメージが根源的な語意として潜んでいるだろう。そこから「起る」「始まる」「始める」の意味も備ってくる。

古事記にあつては、人類の誕生と生態を「草」に擬えている。人の生命と身体、集団社会の形成のかたちといきおいを、土から育つた草と同種と考えていたのだ。そこで、「開」でも「關」でもなく、「現れる」「伸びる」の意味を含んで「發」が選ばれたと読むべきだろう。「天と地が初めて土から芽を出した時」の意である。

「高天原」も、原文註でわざわざ「阿麻」と訓ず、と断っているのだから「タカマハラ」ではなく「タカアマハラ」と読みたい。「成」も「発」と同じで、土から芽生えた草の姿を重ねて読みたい。

「原」に注目すると、神々の住む天も人の生まれた大地と同じような、草原（くさはら）だったと古代の人は考えていたようだ。

〔試訳―その1〕

天と地が初めて姿を現したとき、

天の高天原タカアマハラに芽を出した神の名は、アマノミナカノヌシノカミであった。

（天の原の中にいてその主ぬしの働きをする神）

つづいて、タカミムスビノカミ、

（高い天にあってこの世のさまざまなものを産み出していく仕事を司る神）。

つづいて、カムムスビノカミ、

（神々を産み出す仕事を司る神）。

この御三方おさんかたの神は、みな独り神で、連れ合いを持たない神で、

高天原に身を隠した（天と地を育てる根っこの働きを受け持った）。

つづいて芽を出した神は、

地上が、まだなんの調いもなく、水の上に浮いている脂のようで、

まるで海月のように漂っていたのだが、

そこに葦の芽のように勢いよく萌え上がって現れたのが、

ウマシアシカビヒコヂノカミ、

（美うまし葦ひこぢ牙の男の神）であった。

つづいて、アマノトコタチノカミ

（天につねに立っている神、天の番をする神）。

この御二方おふたかたの神も連れ合いをお持ちではなく、

高天原の土の中に根を張られた。

この五柱いつはしらの神々は、別格の天の神である。